

WORK STYLE REFORM

LIST OF COMPANIES

仕事観が 変わるかも

*Diversity
symposium
for students
and companies*

～多様なライフスタイルを支える働き方～

多様なライフスタイルを

支える働き方や

働きやすい職場環境づくりに

積極的に取り組んでいる企業紹介

13社

ダイバーシティ推進実行委員会おかやま

仕事や家庭で
頑張っている親へ
今だから言える
ありがとう。
～子から親へのエール2019～

普段はなかなか伝えることができない
親への感謝の気持ちを伝える論文コンクール

受賞作品集

ダイバーシティ推進実行委員会おかやま

2019年12月18日発行



強い意志。
書かなければ
いけないという

エール論文の応募数は増え続けており、今年は、速く関東の高校生が応募され、見事受賞されました。エール論文を始めたころは、私を含めて、多くの親の世代が論文に強くひきつけられることに驚いていましたが、ここ最近、授賞式などで学生さんと話している中で、書いてみようというよりも、書かなければいけないという強い意志をもってこの論文に応募される学生さんがいることを理解するようになりました。

この論文集を手にしたある寿司屋の大将が、最近亡くなられたお父様のことを思い、自分も「書きたい」と言われたこともありました。そんなことが幾度かあり、この論文は親のための論文であると同時に子ども自身にとって意味のある論文であると思うようになりました。

当初この論文は、仕事と家庭の狭間に起きているエピソードを社会全体で共有することで、ダイバーシティの活動を広げる中で生まれてくる課題と解決策を考える機会にすることを意図して企画しました。ところが、第一回目の論文を読んだ時から、当初の思惑を超える力がこの論文にはある

と感じておりました。それが何であるのかは、私自身、まだ明確には分かっておりませんが、その力の源泉の一つが、この論文を書く高校生や大学生自身の強い意志にあると感じ始めています。当初は、具体的なエピソードが力を持っているのか、読み手の親としての経験がその力を生み出しているのかなどと、考えていましたが、それ以上に、強い力の源泉が、書き手の、子どもの“意志”なのではないかと思うようになりました。

正直、意志という言葉で表せるものかどうかよくわかりませんが、親の優しさ、家族の苦勞、多様な現実を文章として残そうとする意志、責任、気持ちのようなものがこのエール論文には宿っているように思います。今年もメガネをはずして何度も目をおさえながら論文を読ませていただきました。やはり家族ってかけがえのないものであり、親や子の実体がこの世から消えても決して消えないものなんだと感じ、いずれ消えてなくなる自分の存在への不安に対して安らぎと忍耐をいただいています。

エール論文に感謝！

ダイバーシティ推進実行委員会おかやま
会長 寺澤 孝文
(岡山大学大学院教育学研究科 教授)



大学生部門
岡山県知事賞

学ぶ意味

山陽学園大学 2年 林 夏帆

父は「学ぶ」ことをやめない。

10年前から私たち3兄弟を男手一つで育てる父は整体師として働いている。朝ひと通りの家事を行い、日中は仕事をし、夕食を作ってまた夜遅くまで仕事をする。整体師とは非常に面白い職業である。約1時間の間施術相手とコミュニケーションを取り続けなければならない。様々なジャンルの知識を持つ必要があり、相手を不快にさせない聞く能力が必要だ。そのため父の知識範囲は広い。約1か月に1度県外へセミナーを受けに行っては技術を磨き続け、未知の分野への学びもやめない。気づくと、株の勉強をしたり、放送大学へ進学したりしていた。お客さんにとって良いコミュニケーションを取れるように心理学を勉強したりしているようだ。放送大学への進学を決めた時、私はまだ幼く、なぜ大人になり子どももいる年齢で大学に通うのか全く理解できなかった。しかし、今現在大学生となり、学ぶことを行っている身として、父の行動は間違っていなかったことが理解できる。

私は古典文学に興味があり、大学で勉強している。そんな私に父は大学院進学を勧める。しかし、その勧めを私は素直に受け取ることができない。理系分野に進学した人にとって大学院進学とは当たり前の道であることに対して、文系分野に進学した人にとって大学院進学とは非常にリスクが高い選択肢である。また、文学という学問は就職したあと直接使える知識が少ない。加えて、大学院進学者が就職できる確率は低いという。女性であればなおさらだろう。また、文系の女性研究者が生活に困窮し心を病み自殺したというニュースも見た。奨学金を借りて何とか大学進学ができた私にはもうひとつ上の教育機関へ進学するという選択肢はハードルが高いものだった。

しかし、父は学ぶことがどれほど素晴らしいかを私に説いた。高卒で働き、学生時代に勉強することに対して

よいイメージを持っていなかったが、40代の今学ぶことが楽しいとも言う。知識とは常に使うものではなく、いざという時に使うべきものだ。知識とは、金と天秤にかけるものではない。終身雇用という制度が崩れた現在、情報をどれだけ収集し時代の波に取り残されないかの方がずっと大事だ。就職という選択肢だけに囚われるなんていうつまらないことを考えるなども付け加えた。

「がんばったら報われるとあなたがたが思えることそのものが、あなたがたの努力の成果ではなく、環境のおかげだったことと忘れないようにしてください。」これは東京大学の入学式で今年、上野千鶴子さんが述べた祝辞の中の一文だ。

私は中学生の時、他人より少しだけ学力が高かった。当たり前のように普通科高校に進学し、大学進学をするか否かではなく、どこの大学を受験するかという選択肢を得た。努力は報われるという言葉を実現させ続け、中途半端な努力をした際は当たり前のように失敗して、20年間の人生を歩んできた。私がこのような人生を歩んでこられたのは間違いなく父がいたからだ。大学進学を人生設計の中の一部に組み込むことに疑問を持たない私を父は作ってくれた。他人と同じように勉強し、同じ道具を使い、同じように学校行事に参加できたという事実の中にどれほど多くの父の努力が詰まっているだろうか。頑張れ、大丈夫、本当によく頑張っているね。このような前向きな言葉をかけてくれた家族がいたことに私は心から感謝している。そして、私はその恵まれた環境のおかげでもう一つ上の教育機関で学ぶ選択肢を得ることができた。この選択肢をどう使うか。

今ある現状に囚われるような人間ではいたくない。たった1度の人生を悔いなく、そして大胆に生きてみたいと思う。そして、他人のために使えられるだけの知識と強さを手に入れる。これが私の学ぶ意味だ。



高校生部門
岡山県知事賞

受けた愛情

岡山県立岡山芳泉高等学校 2年 坪井 美歌

七年。それは十七歳である私の人生の約半分の時間であり、家に父がいなかった時間でもある。父は私が幼い頃に海外へ単身赴任した。たまに帰ってくることはあっても私が小学生になるまではほぼ海外で仕事をしていた。父の苦労は計り知れない。その国の言語も覚えねばならず、また人間関係も一から構築せねばならない。だが、父がそのような苦労をしている間、母も大変だったことを忘れてはならない。

日本に残ったのは母と姉と私の三人。母は一人で二人の幼い娘を育てなければならなかったのだ。子ども二人はまだ幼く家事の分担などできないし、家に相談相手もない。そんな厳しい状況の中でも母は私たち姉妹にたくさんの愛情を注いで育ててくれた。運動会などのイベントには必ず来てくれて、二人分のビデオを撮ってくれたし、母が一人で計画、下調べをして旅行にも連れていってくれた。また、悩み事があって母に相談した時も、必ず真剣に聞いてくれ、時には一緒に涙を流してくれた。このように母はいつも私たち優先で動いてくれたのだ。だから私にとって家庭が一番の安息地であったし、母の努力のお陰で父が側にいなくて寂しいと思うこともなかった。だが、この母の努力のありがたみに気づいたのはつい最近のことである。私が小学校六年生になってからずっと日本にいた父が、今年再び単身赴任をすることになり、このことが家族について考えるきっかけとなったのだ。

現在、働き方のスタイルは家庭により様々である。例えば、今の私の家庭は父が単身赴任中で、母はパートタイムで働く共働き家庭である。母がパートタイムで働く

ことを選択したのは、父が不在である家庭の仕事を考慮したからだ。パートタイムの他にもフルタイムやフレックスタイム制などがあり、それぞれの家庭がそれぞれの都合に合うように働く時間を決められるようになっている。また、働く場所も会社ではなく自宅を選択できるようになってきている。その証拠に、在宅ワークやホームオフィスという言葉が普及し始めた。これらのことから、働き方は時代と共に多様性を極めていることが分かる。ただ、この変化の激しい状況の中で変わってほしくないものが一つある。それは親が子供に与える愛情の深さである。父が単身赴任になっても、母がどんなに忙しくても変わらない愛情を両親から受けて育った私だからこそ、そう思うのかもしれない。そして、その愛情を受け取れるのは当たり前ではないことをきちんと理解して、家族全員で支え合える家庭が増えてほしいと私は願う。

高校二年生になり、本格的に進路を決定していかねばならなくなった。私は夢の実現のために、大学へ進学するつもりだ。父が働いてくれているお陰で私の人生の選択の幅が広がっている。母は私の就きたい職業を聞いて「大変なんじゃない？」と私を心配しながらも、それが私の進みたい道なら、と背中を押してくれている。お父さん、お母さん、いつもありがとう。普段だったら恥ずかしくて面と向かって言えないので、この場を借りて言っておいた。もしかしら、この文もなんだか気恥ずかしいので見せないかもしれない。だが、今まで愛情を込めて育ててくれたことへのお礼は私が夢を叶えることによって少しでも返したい。



大学生部門

岡山経済同友会代表幹事賞

普通の家庭なんて

岡山大学3年 三島 知幸

私は自分の家庭を常々普通だと思っていた。父は会社勤めで、母は専業主婦。子供は兄の私と弟の二人兄弟だ。両親はそれぞれ「男は会社で働き女は専業主婦をする」という価値観に何も違和感は抱いていなかったし、事実それで家族は問題なく成立していたと思う。今世の中に浸透してきている多様性などというのは別世界の出来事。昨今ドキュメンタリーでよく見るように両親が離婚をしているわけでもないし、家族の誰かが重い病気ということもない。全てが普通の日本の一般家庭だ。

少しだけ気がかりだったのは、父が不器用な人間だったことだ。あくまで私から見てだが、仕事人間な父は母に時々冷たく当たってしまうことがあった。大学進学前、私の一人暮らしの予算の相談をしているときに父がプランを提案したのだが母が上手く呑み込めず私が父の代わりに説明をしたことがあった。中々複雑な話だったので少し時間がかかってしまった。その様子を見た父が「そんなくだらしないこと」と言ってしまったのだ。母は反発して泣き出した。

そんなことがあってから、進学のために私が一人暮らしを始める日が来た。岡山まで父に引っ越しの手伝いに来てもらった。引っ越しの際中、私はそれまでの家での生活を思い出していた。思春期には両親に反抗的だった自覚があり申し訳ない気持ちがあるが、それも含めて普通の家庭代表として幸せに育ててもらったように感じた。ただ一つ、少し前に見た母の顔だけが普通ではなかった。しかし、父と荷運びをする中でその話題に触れることはなかった。今にして思うと大袈裟だが、それを口に出すと本当に我が家が普通でなくなってしまう気がしたからだ。

引っ越しも終わり、父が帰宅するときにやってきた。本当の一人暮らしの始まりだ。別れ際、私は父に母のことを告げてみた。「お母さんと仲良くしてね。」泣きそうだったので自分でも驚いた。「当たり前だわね。」父はそう返した。良かった。我が家は喧嘩もあるけれど、総合的には幸せな日本の一般家庭だと再認識できた。

一人暮らしで家事をしてみても母の偉大さを知った。アルバイトをしてみても父の偉大さを知った。つくづく自分は甘えた人間だったことを知った。普通に生きるって、大変なのだ。私の率直な感想だった。

そんな私の価値観に雷が落ちる出来事があった。帰省し、母と話していたときのことだった。「遠くへ旅行に行きたいなあ。」母がぼつりとつぶやいた。そういえば、私がいけない間には旅行の本が増えた気がする。「行けばいいんじゃない？」私は何の気なしに返した。「けいくん(弟)が独り立ちしたらね。」私の頭に電気が走った。思い出すと幼いころ、母と弟とよく旅番組を見ていた気がする。主張しないだけで、母は大の旅好きだったのだ。そして私を育てていたために母は望むような旅に少なくとも20年は出ていない。母は普通ではなかったと知った。

思えば、誰しも自分の時間が欲しいのが普通だ。なのに、私は父と母が子供のために時間を使って成り立っていた家庭が普通で幸せだと思い込んでいた。勿論、母は不幸せだったと言うつもりはない。だが自分の欲を20年以上も抑えて人のために時間を使うのは尋常ではない。

「普通な家庭」など、原理的に存在しない。

私は普通という言葉を仮面代わりに父の三島賢一と母の三島喜代美というれっきとした個人の顔がきちんと見えていなかったらしい。

「家族の多様性」というと、ステレオタイプとは逆に両親が共働きで・・・実は両親には特別な事情があって・・・けれど頑張っていて・・・というようなイメージが先行する。私もそう思い込んでいた。しかし「普通な家庭」などどこに存在するのだろうか。細かく人の想いを汲んでいけば皆多様性に富んでいる。

家族にすら限った話ではないかもしれない。どんな人物だって、オリジナルの物語を両手にいっぱい抱えて生きている。「普通」だって全然普通じゃない。多様性を認める、とはすなわち目の前の相手を見る目の解像度をぐっと引き上げることなのだ。

一そしてある夏、母が望んだ場所への家族旅行が実現した。



高校生部門

岡山経済同友会代表幹事賞

頑張り屋のDNA

千葉県立千葉高等学校1年 梶山 亜莉沙

「ママはどうしてそんなに頑張れるの？」日頃の母を見ていると、ついそう訊きたくなる。母は幼い頃から厳しく躰られた為、よく「頑張り屋さん」と呼ばれて来た。だから、頑張る事は当たり前で、全く苦にならない。

母は二十八歳の時、日本語講師から大手英会話スクールのスタッフに転職した。初めは営業という慣れない仕事に苦しんだようだが、気付けば関東最大校を任せられ、海外校に赴任し、最終的には入社三年で、約三十校のスクールを運営する子会社社長に就任した。勿論、悔し涙を流したり、プレッシャーで食事も喉を通らなかつたり、眠れなかつたりしたこともあるそう。しかし、持ち前のバイタリティと負けん気で乗り越え、二百人以上のスタッフを統率し、仲間と会社を盛り上げたと聞いている。退職して随分経つが、今でも彼らと交流があり、母がどれだけ苦労し、頼られ尊敬されていたのか、会話の中から垣間見ることが出来る。そんな母を大変誇りに感じ、私も母のようなキャリアウーマンになりたいと、いつの頃からか考えるようになった。

結婚後も、大好きな家族の為に苦労を惜しまない母。今から十年前、突然、兄が難病に冒された。なかなか微熱が引かない為、近くのクリニックを訪れると、その場で大学病院の紹介状を手渡され、兄は即入院。検査結果は耳を疑うような病名で、母は冷静な判断が出来ないまま溢れ出そうな涙をこらえ、自分よりはるかに大きなショックを受けている兄を懸命に励ました。その日から兄の長く辛い闘病生活が始まった。我が家は父が海外赴任の為、全て母の双肩にかかっていた。どんな時も母は弱音を吐かず、笑顔で接してくれたので、不安を感じることはなかった。兄は再発を繰り返し、母は朝から晩まで兄に付きっきりだった。兄の食欲がなければ、昼と夜の二食を準備して面会。夕方には私の為に一時帰宅し、習い事の送迎をしてくれた。兄の入院で、私が寂しい思いや我慢をしなくていいよう、母が配慮してくれていたのだ。自分の休む時間を削ってでも、私たちの事を最優先にしてくれた母。兄も私も母の大変さは十

分理解していたので、それぞれが必死に頑張った。だから、兄の一時帰宅は本当に幸せだった。普段、兄の病室に入れない私は、家族と一緒に居られるだけで、とにかく嬉しかった。

しかし、そんな時間は長くは続かなかった。兄は七年前、誕生日の一週間後、息を引き取った。三年間、一度も涙を見たことのない母が、兄にすがり大粒の涙をポロポロ流し「丈夫な身体に産んであげられなくて本当にゴメンね。」と何度も何度も謝っていた。葬儀の時は立っている事さえままならず、私は母の側を離れることが出来なかった。抜け殻同然になってしまった母は、毎日泣いて過ごし、一日中兄の真新しい仏壇の前に座り込んでいる日もあった。初めて見る弱い母の姿に、私もどうしていいか戸惑うばかりだった。

そんな母が、ある日、迷い込んでしまっていた長いトンネルから抜け出られたかのような晴れ晴れとした表情で私に言ってきた。「今まで心配かけてゴメンね。ママ、今日からまた強くなるからね。昨日、お兄ちゃんが夢に出てきたの。『ママ、もう悲しまないで。ボクもう痛みもなくなつたし、辛いよ。いつもママの所にいるから心配しないで。』って言ってくれたの。」と声を弾ませ嬉しそう。間違いなく、母はかつての自分を取り戻した。

どんな事があっても、母は私の憧れであり、目標だ。ただ一つ違うのは、私は結婚しても仕事を続けようと思っている。決して器用ではない私にとって、仕事と家事、育児の両立は難しいかもしれないが、家族の理解と協力を得て頑張りたいと考えている。母の頑張り屋のDNAを受け継いでいる私なら、必ず母のように、いや母以上に頑張れる自信がある。「ママ、私、ママの娘で本当によかった。ママは我が家の太陽なんだからね。これからも私たちを温かく照らしてね。ママ大好きだよ。」



高校生部門
岡山大学長賞

たくさんの愛情をもらって

岡山県立岡山芳泉高等学校 1年 岡本 優奈

私の物心がついたときには、両親はすでに共働きだった。しかし改めて、両親の仕事について母と話すとはなかったと知り、衝撃を受けた。

私が生まれる前までは、二人共正社員として働いていたそう。父は今日まで市役所で働いているが、私を産み産休・育休に入った母は、育休後も元の仕事には復帰しなかったという。会社の形態の変化に一因があるものの、それは大きな理由ではなかったらしい。当時保育園に預けられていた私。いつも泣きじゃくっていたそう。そんな私を置いてまで働かなくても良いのではないかと考えた両親は、自宅で子育てをしながらでもできる母の仕事を探したそう。

私が小学校に入学した年から母はパートタイムで今の職についている。最初はまだまだ幼かった私と妹の送迎や子育てのためにパートでの勤務だったそう。そこで「なぜ私も妹ももう幼くないのに未だにパートなのか。」と母に問うと、「今はパートでなければ子育てができないのではなく、子供のやりたいことをサポートするためにパートで働いているんだ。」という答えが返ってきた。私も妹も一時間以上かけて学校と習い事に行っている。やりたいことを全力で応援してくれる家族の裏には、正社員で働きたいと思いつつも、今でもパートとして働く母の姿があった。

ここまでの話のあと、母は「今までの私の仕事は決してお金のためではなかった。私の中で仕事と子育てを天秤にかけたとき、どうしても子育てを優先したかったから、今までの選択がある。」と言った。この話の中で聞いた両親の仕事の選択にはいつも私が関わっていることに気付かされた。こんなにも子供のことを考え、私達の成長におけるサポートをしていているとは思っていなかった。普段はそんな素振りを見せるこ

とのない両親が私にくれた深い愛情を感じ、両親の背中が大きさが一層大きくなった気がした。

母が子供のためにと仕事を選んでいく中で不自由なく育つことができたのは、いつも変わらず寡黙ながら熱心に働く父の存在があるからに違いない。そのような周囲の支えがあつてこそ、仕事は成り立つのだと思う。自分はこれからの長い将来を生きる上で、働く側にもサポートする側にもなっていく。その上で周囲のサポートの大切さは忘れてはならないだろう。

産休・育休が叫ばれる現代社会。仕事復帰後の会社側の支援は必須であるといえる。もっと大切なことは、時間外労働などで親子の時間を会社が奪ってしまわないことではないだろうか。もちろん、親子の時間が長いことが一概に良い訳ではない。様々なライフコースをたどる個人に合わせた最善の選択や、働かざるを得ない状況の中での選択もあるといえる。

そんな中でも、私は胸を張って父と母の元に生まれてきてよかったといえる自信がある。それは、今まで二人が私に注いでくれた愛情や、二人の選択を知った今、至極当然であるべきことのようにさえ感じる。仕事と家庭の両立であるワーク・ライフ・バランスの実現を目指しながらも仕事と家庭のどちらを優先するかは人それぞれだ。私が将来どちらの選択をするかは分からない。しかし、一つだけ言い切れることがある。私が今考えているように、私の子供に私のところに生まれてよかったと思ってほしい。そんな私の理想を現実に行っている両親を尊敬している。

お父さん、お母さん。産んでくれて、育ててくれてありがとう。



入 選

大学生部門

岡山大学 1 年
一瀬 美里

高校生部門

見華学園高等学校 2 年
曾根 優花
岡山県立岡山芳泉高等学校 2 年
山本 菜緒



ダイバーシティ教育推進学校賞

岡山市立岡山後楽館高等学校

おかやま山陽高等学校

岡山白陵高等学校

岡山県立岡山芳泉高等学校

津山工業高等専門学校

徳島県立脇町高等学校

(50 音順)

論文コンクールについて

「仕事や家庭で頑張っている親へ今だから言えるありがとう。～子から親へのエール論文～」と題して、仕事や家庭で頑張っている親に対して、泣いたり、笑ったりしたエピソードや親へのエールとなるメッセージを添えて、働き方の多様性を主に家庭の視点から考えることを目的に、高校生・大学生等から論文を募集いたしました(2019年6月～10月募集)。

応募があった高校・大学等

岡山大学、山陽学園大学、西武文理大学、第一工業大学、岡山市立岡山後楽館高等学校、おかやま山陽高等学校、岡山県立岡山操山高等学校、岡山白陵高等学校、岡山県立岡山芳泉高等学校、大阪府立北かわち暁が丘高等学校、千葉県立検見川高等学校、見華学園高等学校、清美平成中等教育学校、大分県立竹田高等学校、千葉県立千葉高等学校、津山工業高等専門学校、日本大学第一高等学校、徳島県立脇町高等学校

選考は、岡山県内の大学関係者による審査会にて行いました。今年度は、昨年度に引き続き、岡山県知事賞、岡山

経済同友会代表幹事賞、岡山大学長賞、入選、本コンクールを通じて多様性の教育推進に取り組んだ学校へ贈るダイバーシティ教育推進学校賞を選考いたしました。各賞の表彰は岡山県庁3階特別応接室にて表彰式(2019年12月17日開催)を行いました。

審査委員一覧(50音順)

岡山大学大学院教育学研究科
教授 片山 美香

山陽学園大学総合人間学部言語文化学科
教授 佐藤 雅代

就実大学大学院医療薬学研究科
教授 塩田 澄子(審査委員長)

岡山大学大学院教育学研究科
教授 寺澤 孝文

岡山大学大学院環境生命科学研究科
准教授 樋口 輝久

「ダイバーシティ推進実行委員会おかやま」について

当実行委員会は、大学生等のキャリア教育や情報発信、調査研究を通じて、家庭と企業双方の視点から男女共同参画の推進や働きやすい環境づくりなどダイバーシティの推進を行うことを目的として、岡山大学、一般社団法人岡山経済同友会、岡山県で構成された組織です。ダイバーシティに関するシンポジウムや論文コンクールを実施しています。

実行委員会構成団体

国立大学法人岡山大学
一般社団法人岡山経済同友会
岡山県

事務局

株式会社ロゴデザイン

● **取り組み内容**

- ① 妊娠した社員が妊娠判明後、どの時点からでも休暇が取得できる「出産準備休職制度」を創設し、早期休暇取得を支援。
- ② 子どもとのふれあいを家族団らんを目的に「週1回のノー残業デー」「リフレッシュ休暇」「アンバーサラー休暇」「ブリッジ休暇」を導入。
- ③ 介護や育児を両立させる働き方を支援するため、在宅勤務制度、フレックスタイム制度を導入。
- ④ 職場・仕事への理解を深める施策として、社員の子どもを会社へ招待し、簡易なプログラミングやAI体験などを行う「ファミリーデー」を開催。
- ⑤ 育児と仕事の両立を支援するため、利用希望者へベビーシッターの割引券を交付する「ベビーシッター割引制度」を導入。

● **事業内容**

行政・医療分野に専門化した独自ブランドシステムを自社開発し、全国で高シェアを実現。ソフトウェア開発のほか、コンサルティング、データセンター運営、IoT・AI研究開発などにも取り組んでいます。

URL www.ryobi.co.jp



上：ファミリーデーで家族と一緒にプログラミング
下：両備システムズ岡山本社社屋

● **取り組み内容**

事業内容(保育・障害者支援)の特性から、女性が多い職場であり、女性の活躍が、事業推進の大きな原動力となっています。この様な現状の中、男性、女性に関係なく、「長く安心して働き活躍できる職場環境」を整備していくことは、仕事と子育ての両立だけでなく、人材確保・人材定着の面からも重要であると考え、以下の取り組みにできました。

<具体的な取り組み>

- ① 適正な労働時間の管理と事務処理の見直し、簡素化
- ② 一人当たりの年次有給休暇取得率50%達成
(2018年度取得率：68.9%)
- ③ 男性職員の育児休業取得促進(取得実績2名)
- ④ 育児短時間勤務制度の対象を小学校就学前までに拡大

● **事業内容**

浅口市内に保育所2カ所、障害者支援施設1カ所の計3事業所があり、関連事業としてグループホーム、相談支援事業を実施。「必要な支援を、必要な人に、必要な時にさりげなく提供すること」をモットーとしています。

URL www.meikoukai1970.com



上：女性管理職・リーダーも多く在籍！女性が活躍中！
下：次世代リーダー育成研修の様子

● **取り組み内容**

2014年より専門組織を設け、ダイバーシティ推進に取り組んでいます。女性活躍推進を重点課題とし、年齢、国籍、性別、宗教、性的指向、性自認、障がいの有無を問わず、社員一人ひとりが働き続け、活躍するための環境整備を行っています。

社員のワークライフバランス支援施策として、人事制度面では、在宅勤務制度や帯同休業制度の導入、コアタイムなしフレックスタイム制度、育児や介護の短期休業の一部有給化をしているほか、設備面では、事業所内託児所、及び宗教的配慮として祈祷室を各2拠点に設置しています。

今年、LGBT対応として、社員就業規則の結婚の定義に、同性婚を適用しました。今後も多様な社員が活躍できる職場づくりに取り組めます。

● **事業内容**

三菱自動車は、「お客様が今までできなかった体験を可能にしたい」、「もっと豊かなクルマ社会を実現したい」の信念のもと、世界各国の需要動向に応じて新型車の開発・生産を行なう自動車メーカーです。

URL www.mitsubishi-motors.com



上：LGBTセミナー
下：託児所

CASE STUDY 13

多様なライフスタイルを

支える働き方や

働きやすい職場環境づくりに

積極的に取り組んでいる企業紹介

● 取り組み内容

一人ひとりのライフスタイルに合った就労支援はもちろん、キャリア形成支援、仕事と家庭の両立支援など、きめ細やかなサポート体制を整えています。女性社員の割合が約61%を占める弊社では、グループ本部内に設置した事業所内保育所をはじめ、早期復職を支援する「復職プログラム」、男性の育児参加を促進する「パパプロジェクト」などに取り組み、現在女性社員の出産後の復帰率は100%、全管理職に占める女性の割合は約51%となっています。また「健康経営」の取り組みとして、社内にスポーツジムを完備し、社内専門職によるイベント・セミナーの実施など自分自身の健康と向き合う機会を提供し、社員のヘルスリテラシーを高めています。

● 事業内容

創業以来、「社会の問題点を解決する」という企業理念のもと、誰もが自由に好きな仕事を選択し、働く機会を得られること、そして心豊かな生活を創造するために、常に新たな社会インフラを構築しています。

URL www.pasonagroup.co.jp



上：社内スポーツジムの様子
下：社内保育園の様子

● 取り組み内容

当社は、人（職員）が最大の財産であるとの認識のもと、ワークスタイルの変革に向け、『ワークにおける前進』と『ライフの更なる充実』を互いに好循環させる、という“ワークライフマネジメント”の実践を推奨しています。具体的には、自己成長に繋げる時間の捻出に向けた休暇取得を推奨する「ブラッシュアップデー運営」や、資格取得促進・健康増進意識の醸成を後押しする機会提供として「ニッセイアフタースクール」等の取組を実施しています。

また、育児・介護・病気治療等に直面した場合でも、仕事と両立しながらキャリアを形成していけるよう、意識啓発を進めるとともに“お互い様意識”のある職場づくりを目指しています。

● 事業内容

個人および企業向け各種保険の引受け・保全サービス、有価証券投資・貸付・不動産投資など受託資産の運用、付随業務
URL www.nissay.co.jp



上：ニッセイアフタースクール
下：産育休復帰後職員向け仕事と育児との両立セミナー

● 取り組み内容

- ・いきいきと働いている社員の社内誌での紹介
- ・育児休職中の社員を対象とする、復職に向けたセミナーの実施
- ・特例子会社の事業領域拡大による、障がい者の自立支援
- ・社長メッセージ発信による「働き方改革」(限られた時間内で成果を出す、一人でできないことは仲間とシェアする、多様な働き方を認め尊重する等)の価値共有
- ・ICTを活用して、働く場所や時間の制約をできる限り取り払った「テレワーク」の本社及び支社等への導入
- ・多様なチャネルからの採用で、幅広い人材を確保
- ・間接部門と一部現業部門における、フレックスタイム制の導入
- ・「子育てサポート企業」として、厚生労働大臣の認可を受けた証である「ぐるみん」に3回認定等

● 事業内容

JR西日本グループは、2府16県におよぶ広大なエリアにおいて、1日あたり約500万人のお客様にご利用いただいている鉄道ネットワークや1,200を超える「駅」という拠点を活かし、様々なビジネスを展開している。
URL www.westjr.co.jp/company/recruit



上：育児中社員向けセミナー
下：テレワーク中の社員

● 取り組み内容

弊社は人財の採用・育成・評価という企業様の人事のサポートをする会社。私たちが地元中小企業にとって理想的な人事戦略を行うことは必然であり、企業ブランディングでもあるのです。地元の中小企業はここまでの、働き方改革はしないだろう！？というレベルを実践し、私たちの体験を事例としてお客様に情報提供をしています。

働き方改革実践事例

システム導入（勤怠管理・営業管理・業務管理・人事評価）による効率化／パワーアップ休暇／ワークライフバランス休暇／プレミアムフライデー／時短正社員制度／時差出勤制度／年間休日123日／健康経営（禁煙手当支給など）／オカジョブカフェ勤務OK／テレワーク制度導入取り組み／育児交流会の開催

● 事業内容

岡山・広島・福山を拠点に地元企業の業績アップをサポート。新卒・中途・アルバイトを中心とした採用支援、新人から幹部層まで対応する研修支援、人事制度の構築や組織分析・営業支援など組織の仕組み化支援など。
URL www.seedsjp.com



上：オカジョブカフェで勤務OK！
下：育児交流会の様子

● 取り組み内容

ハードワークをイメージされがちなマスコミ業界にあって、山陽新聞社は2017年、この年を「働き方改革元年」と位置付けると宣言。長時間労働の削減、休日消化に向けてさまざまな取り組みを進めています。

【主な取り組み】

- ・ノー残業デーを各職場で設定
- ・終業から始業までに一定の休息を入れる「勤務間インターバル規制」の試験導入
- ・休暇制度の拡充（メモリアル休暇日数増、永年勤続慰労休暇）
- ・女性管理職の登用促進など。

● 事業内容

創刊の精神「地域とともに」を貫いて140年。地域の日常はもちろんのこと、地域に眠る宝、地域が抱える課題にフォーカスしたタイムリーな情報発信と、地元・岡山をさらに元気にするための仕掛けづくりに奔走しています。
URL c.sanyonews.jp



上：マスコットキャラクターのさん太(右)とよう太(左)
下：勤続10年で表彰される社員

● 取り組み内容

片山工業では、『社員は最も大切な財産である』という理念のもと、仕事・家庭・子育てを支援する取り組みを積極的に実施し、社員が働きやすい職場環境を整えています。

- ①事業所内保育所(おもいやり保育園)を2013年に開園
- ②柔軟な働き方ができるよう非製造部門でフレックスタイム制度を導入
- ③育児短時間勤務を小学校就学前までに拡大
- ④看護休暇・時間外勤務の制限(1ヶ月24時間以内)の適用範囲を小学校3年生修了までに拡大
- ⑤2018年1月に妊娠通院休暇制度を導入
- ⑥毎週水曜日・金曜日を「ノー残業デー」に設定
- ⑦失効する有給休暇を育児等で使用できるように積立有給休暇制度を導入
- ⑧男性の育児休暇奨励(取得実績4名)
- ⑨家族を対象とした職場見学会「Katayamaファミリーデー」を開催

● 事業内容

各種自動車用部品、福祉機器、ウォーキングバイシクル、金型・専用機等の製造、及び弁当の調理・宅配 ほか
URL katyamakogyo.jp



上：おもいやり保育園のハロウィンの様子
下：ファミリーデー

● 取り組み内容

働き方改革プロジェクトを発足し、ワークライフバランスを重視し、長時間労働の抑制、年次有給休暇の取得促進、社内規程・職場環境の改善など社員がより働きやすい取り組みを継続的にを行っています。

<取組事例>

- ・フロア整理整頓、照明器具、空調FAN、BGM等働きやすい職場環境づくり
- ・ノー残業デー、ポスター、缶バッジ配布等で意識改革
- ・勤怠管理システムによる勤務の見える化を行い長時間労働の抑制、有給取得促進
- ・グループウェア、ビジネスチャット、RPA導入による業務効率化、生産性向上
- ・短時間勤務制度を改定し小学校3年生終業まで取得可能
- ・1時間単位有給休暇取得可能。

● 事業内容

公共、民間、医療・福祉等それぞれの分野に特化したノウハウを発揮し、ICTで様々なシステムの構築と運用をサポートすることでお客様の業務に精通した最適なソリューションをご提供、社会の発展に貢献しています。
URL www.oec-o.co.jp



上：全社員対象メンタルヘルスセミナー
下：働き方改革・ノー残業デー啓発バッジ

● 取り組み内容

育児休業は2歳まで、小学校2年生終了まで育児時短制度があり、介護休業は1年半まで、介護時短制度は、3年まで利用できます。妊娠したことの申し出があった場合、利用できる制度・給付のご案内を個別にしています。また、家族の介護について相談があった場合も同様です。育児及び介護休業中の職員へ、毎月部内報や学習資料等を送り、感想や近況報告返信などのやりとりをしています。

『仕事と育児の両立』などをすすめる事業主として、岡山県内で最初に『くるみんマーク』の認定を受けました。また、2007年度『雇用均等・両立推進企業表彰ファミリー・フレンドリー企業部門』で、その年全国唯一の厚生労働大臣優良賞も受賞しました。また、2019年4月『プラチナくるみんマーク』の認定も受けました。

● 事業内容

岡山県内で34万世帯(組織率40%)の組合員さんへ宅配事業や店舗事業を通して食料品・日用品等を供給しています。福祉事業、共済事業、旅行等のサービス業も行う総合生活関連組織として活躍しています。
URL www.okayama.coop



上：えるぼし認定証交付式
下：新入協職員

● 取り組み内容

『元氣と、その先の笑顔のために。』
 オージー技研は、創業70周年を迎え、大きな変革と挑戦に取り組んでいます。

- 多様な働き方への対応—新人事制度の導入
- 仕事と育児の両立支援—企業主導型保育事業による保育園「オージーキッズフィールド」の開園、子どもが10歳になるまで適用可能な短時間勤務制度の拡充
- ワークライフバランスの推進—残業時間削減のため数値目標を設定し、週1回のノー残業デーを実施
- 健康経営宣言—社屋内・敷地内の全面禁煙化
- 心身ともに健康で長く働き続けられる環境の整備

『すべての方の元氣と、その先の笑顔のために』
 生涯元氣で活躍できる“ウエルネスな社会”を目指しわたしたちはこれからも挑戦し続けます。

● 事業内容

医療・福祉・健康機器の製品の開発、製造からメンテナンスまで、自社で一貫して行う。“技術第一主義”を理念に掲げ、保有する特許は200件超。国内で培ってきた実績をもとに、“世界No1”のリハビリメーカーを目指しています。

URL www.og-wellness.jp



上：様々な部門で女性の活躍が広がっています
 下：企業内保育園「オージーキッズフィールド」

● 取り組み内容

ドコモは、次世代育成支援対策推進法に基づいて厚生労働大臣が認定する「子育てサポート企業」に取り組み、2018年5月には「相当程度両立支援の制度の導入や利用が進み、高い水準の取組みを行っている企業」を評価する「プラチナくるみん」の認定を受けました。

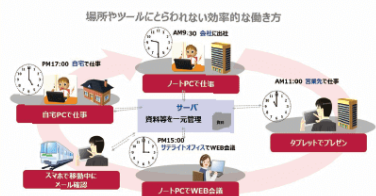
ダイバーシティ経営のポイントの1つである「多様な働き方への対応」として、ワークスタイルの選択肢を広げる取組みを行っています。

勤務時間の個人シフト（スライドワーク）、定時退社・朝型勤務（プライオリティワーク）、フレックスタイム制、在宅勤務などの仕組みを取り入れ、社員に広く活用できる環境を整えています。

● 事業内容

当社グループの主要な事業内容
 通信事業（携帯電話サービスなど）、スマートライフ事業（dマーケットを通じたサービス、金融・決済サービスなど）、その他の事業（法人IoTなど）

URL www.nttdocomo.co.jp



上：テレワークによる働き方の変化（イメージ）
 下：ダイバーシティ活動の一環として開催しているファミリーデーの様子

CASE STUDY 13

多様なライフスタイルを

支える働き方や

働きやすい職場環境づくりに

積極的に取り組んでいる企業紹介

「育児や介護との両立」「少子高齢化に伴う生産年齢人口の減少」「ニーズの多様化」など、それぞれのライフスタイルは本当に様々です。自分のライフスタイルにあった働き方を見つけるためには、まずどんな「働き方」があるのかを知ることはとても大切です。

この冊子では、2019年12月18日に開催の「学生と企業のためのダイバーシティシンポジウム」併設ブースに出展した働き方改革や働きやすい職場環境づくりに取り組む企業13社の事例をご紹介します。企業選びや社内改革のヒントになれば幸いです。

ABOUT US

ダイバーシティ推進実行委員会 おかやま

当実行委員会は、大学生等のキャリア教育や情報発信、調査研究を通じて、家庭と企業双方の視点から男女共同参画の推進や働きやすい環境づくりなどダイバーシティの推進を行うことを目的として、岡山大学、一般社団法人岡山経済同友会、岡山県で構成された組織です。

ダイバーシティに関するシンポジウムや論文コンクールを実施しています。

構成団体 国立大学法人岡山大学
 一般社団法人岡山経済同友会
 岡山県
 事務局 株式会社ロゴデザイン